

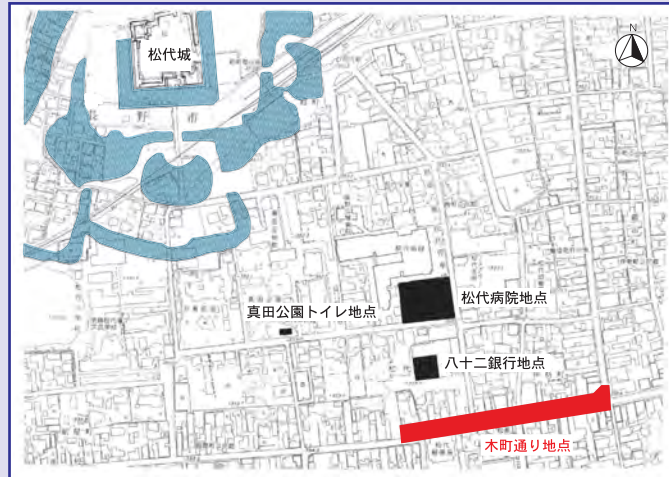
六^あ連^ん銭^{せん}

真田十万石を掘る



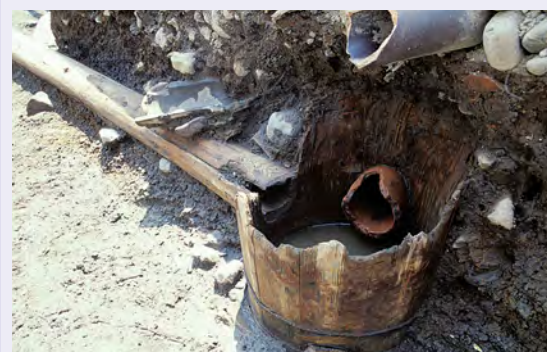
松代城跡 出土瓦

松代城下町の調査



城下町発掘調査位置

松代城の南方から東方には城下町が整備され、十
万石の城下町として栄えました。平成13～16年度
に木町通りで道路工事に伴う発掘調査が行われまし
た。江戸時代の絵図と照合すると、この辺りは町人
が住んだ町屋と武家屋敷の一部に相当します。調査
により、多彩な水道施設の存在や火災によって倒壊
した店舗跡と考えられる遺構などが発見され、松代
城下町の実像が明らかとなってきました。



木樋と集水枡

水道施設 —木樋と分かれ枡—

出土した木樋は丸太材を削り貫いてつないだもので、水道管の役割を担っ
ていたものです。先端は分かれ枡に接続し、水を各地に送るようになっていま
した。この他にも、板を箱形に組み合わせたものや竹をつなぎ合わせた竹樋など
があり、上水・排水など用途に応じた使い分けがされていたようです。また、木
樋が近代の土管に替えられている部分もあり、現在の下水道が整備されるまで
繰り返し改修し、使用していたと推察されます。



店舗の焼失跡か

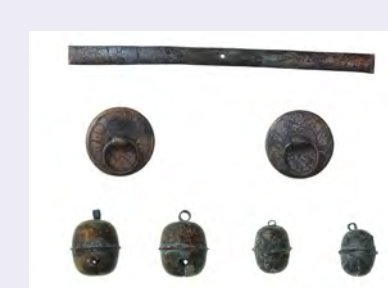
多量の焼土とともに同じ種
類の皿などの陶磁器が多量に
出土しました。また、これら
の製品は重なった状態で出土し、
熱を受けて変質したものもあり
ました。こうしたことから
陶磁器などを売っていた店舗
が火災により倒壊した可能性
が考えられます。出土した遺
物の年代はおよそ17世紀後半
から18世紀前半とされること
から、火災の時期は18世紀前
半と推定されます。



幼児の埋葬墓

武家屋敷の門と考えられる遺構付近から、
小さな早桶に遺体を納めた埋葬墓がみつか
りました。鑑定の結果、出土した人骨は2～3
歳の幼児であることがわかりました。

早桶からは副葬品として納めた筒守も出土
しています。筒守とは幼児のお守りとされる
もので真田家に伝わる婚礼道具にも同様の
ものがあります。



出土した筒守



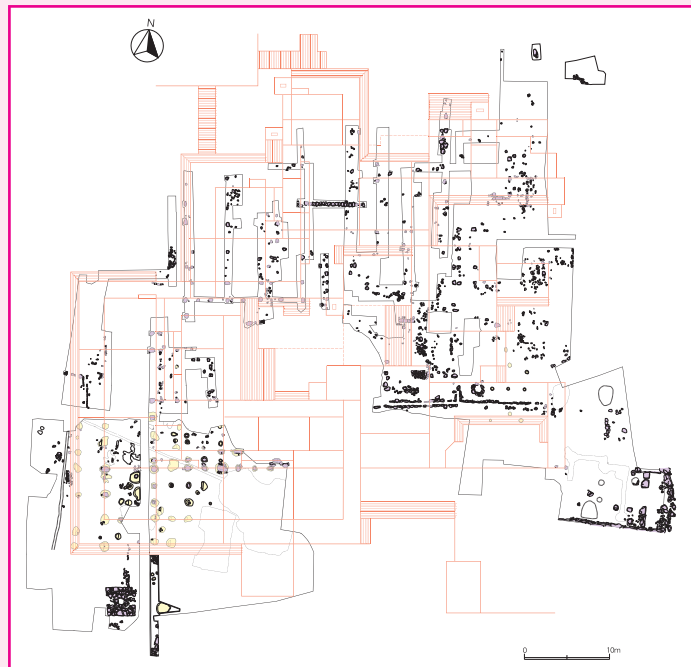
真田宝物館所蔵の筒守



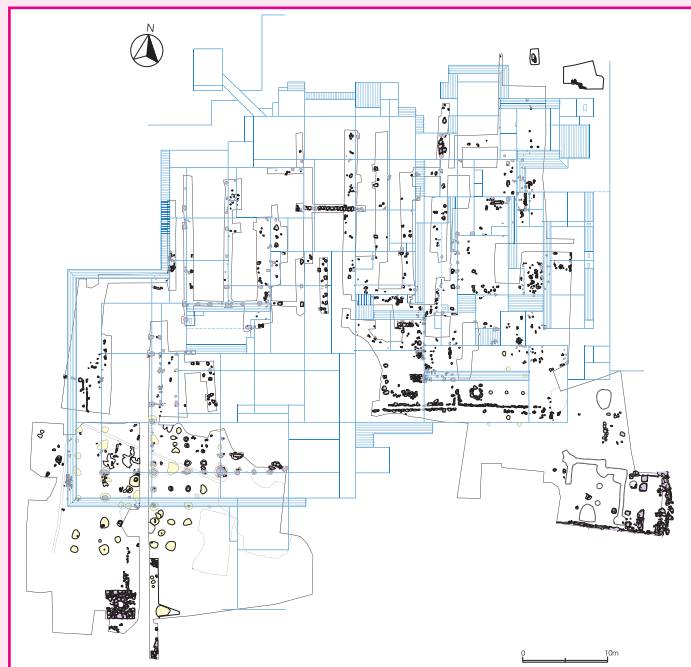
重なって出土した陶磁器

本丸御殿の発掘と火災の痕跡

本丸御殿跡と思われる建物の礎石や礎石の抜き取り痕が発見されました。これらの配置を分析したところ、柱間の異なる2種類の建物の存在が明らかとなりました。一方の建物は柱間が6尺5寸(約1.97m)、もう一方の建物は柱間が6尺(約1.82m)です。本丸御殿を描いた絵図は現在数点伝えられていますが、これらの絵図との比較や、礎石の熱を受けた痕跡の有無などから、6尺5寸の建物は享保2年(1717)の火災以前の本丸御殿、6尺の建物は火災後に再建された建物と推定されます。しかし、発掘調査では、火災の年代を特定できる遺物は認められず、この火災の痕跡が享保2年のものと断定することはできません。



火災以前の建物(1間=6尺5寸)と礎石配置



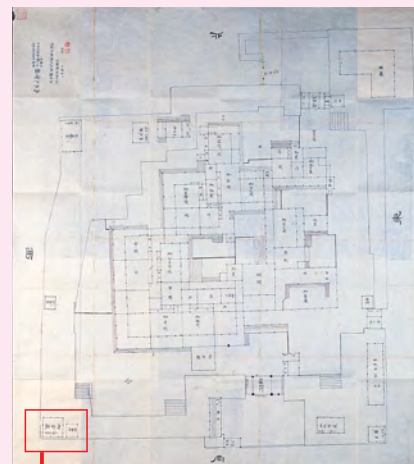
再建後の建物(1間=6尺)と礎石配置



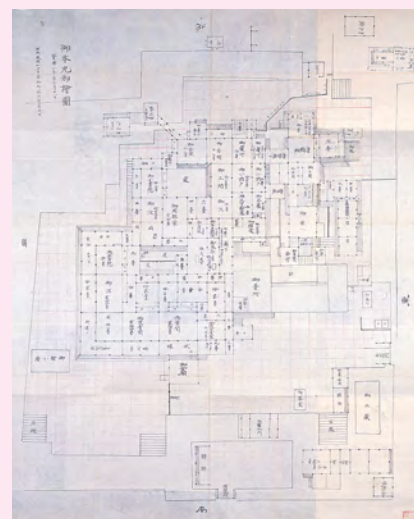
本丸御殿の礎石と井戸



本丸御殿跡で検出された焼土



享保2年(1717)の火災による焼失に伴って作られた絵図。火災前の本丸御殿を描いたもの。



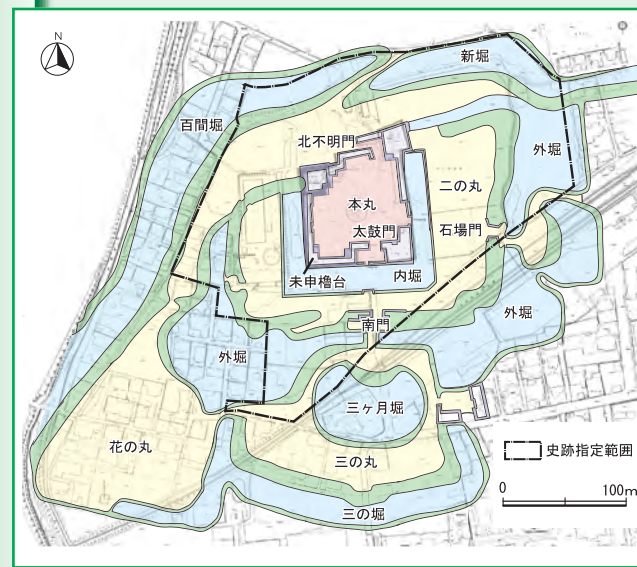
宝暦10年(1761)の記載がある。監察日記(真田宝物館所蔵)には、宝暦5年(1756)から宝暦10年(1761)にかけて本丸の「建て継ぎ」を行ったとの記録があることから、建て継ぎ普請に伴い製作されたものと考えられる

御本丸絵図(長野市立博物館所蔵)

御本丸絵図(長野市立博物館所蔵)

松代城の発掘調査

松代城は昭和56年に国史跡の指定を受け、整備に伴った発掘調査・保存修理工事が昭和60年度から平成16年度にかけて行われました。発掘調査では、本丸・二の丸・堀の一部を調査し、これらの成果に基づき現在は太鼓門・北不明門・内堀・橋などが、当時と同様の木材・工法で復元されています。



信濃國河内嶋松代城
 櫓・堀・門・橋・柵且つは家作等、
 今度悉く消失候。本丸東方
 石垣窓所孕み候に付き築き直しの事、
 堀々埋り候に付き残らずこれを浚う事、
 櫓拾式箇所、櫓門七箇所、
 冠木門九箇所、埋門式箇所
 これを建つるの事、堀八百三拾五間、
 橋三箇所これを懸けるの事、柵
 式箇所、絵圖書付けの通り
 その意を得候。連々を以つて元の如く
 普請あるべく候。恐々謹言。
 (二七七年)
 享保二酉 久世大和守 重之(花押)
 四月廿八日 戸田山城守 忠真(花押)
 阿部豊後守 正喬(花押)
 井上河内守 正岑(花押)
 (三代藩主・真田幸道)
 真田伊豆守 殿



御本丸絵図「御金蔵」部分拡大



未申櫓の基礎と焼土

未申櫓台

本丸の南西部に位置する櫓台です。発掘調査によって、櫓の基礎構造が明らかとなり、熱によって溶着した一分金や寛永通宝など多量の銭貨が見つかりました。消失前の本丸御殿を描いた絵図「御本丸絵図」には櫓に該当する部分に「御金蔵」と書かれており、銭貨などを納めていた建物が火災によって焼失したと考えられます。

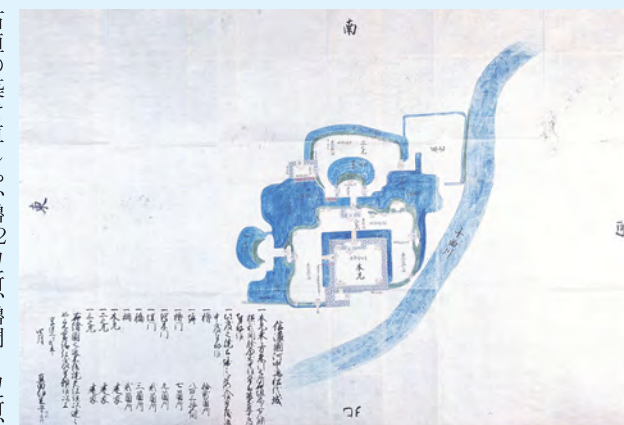
松代城と火災

文書や絵図資料の記録によると松代城は享保2年(1717)の城下町を火元とする火災によって、本丸・二の丸を始め、城内の建物の多くが焼失したと記されています。

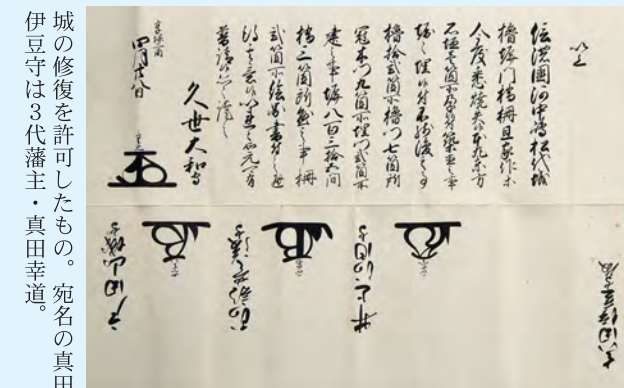
下の絵図「信濃國河内嶋松代城」は享保2年の火災後に城の修復を幕府に願ひ出たものです。絵図には松代城の縄張と共に石垣や櫓・門・橋などの修復箇所が記され、絵図の通り残らず焼失したため、元の通りに修復したいと書かれています。これに対する幕府の許可書状が真田家文書の中に伝わっています(「幕府老中連署状」吉112-1)。

このように、松代城における火災の被害は文書や絵図によって知られていましたが、この度の発掘調査でも火災の事実を裏付ける痕跡が発見されました。

石垣の築き直しや、櫓12カ所、櫓門7カ所、橋3カ所などの建て直しを幕府に願ひ出た絵図。



信濃國河内嶋松代城(長野市立博物館所蔵)



幕府老中連署状(真田宝物館所蔵 真田家文書 吉112-1)



一分金や寛永通宝などの銭貨が火災による熱で溶け固まっている。